

市民サロン塾 第7回 平成27年12月7日(月) 13:30~15:30

「人生講和」

— 写経をして、“無”になって自分を見つめる

講師：横山 亮英 氏

鶴瀬公民館 いきいき活動室 受講生 15名 スタッフ 4名の参加でした。

来迎寺（天台宗）住職の横山亮英氏から“本日は地獄について”講和がありました。

浄土宗や浄土真宗では極楽や地獄のことが話され、南無阿弥陀仏を唱えると救われると言われます。

千年以上前、源信と言う僧侶の時代に念仏を唱えることが広まりました。源信（942～1017）は幼名を菊王丸と言い、比叡山の僧侶が奈良に立ち寄った際の言い伝えがあります。僧侶が二筋ある川で弁当の入れ物を洗っている時に、遊んでした菊王丸が“そっちよりこちらの川の水の方がきれいだよ”と言いました。僧侶は“浄穢不二”と言って、ものには綺麗とか汚いとかはないのだよ”と言いましたところ、“それなら洗う必要はないじゃないか”と言いました。返事に驚いた僧侶は頓智ですが、数を言うとき一から九までは最後に「つ」がつくが十にはなぜ付かないかと尋ねたところ、菊王丸は“五つに「つ」が二つ付いているからだ”と答えました。驚いた僧侶はたいそう賢い子どもなので比叡山に連れて帰りました。

比叡山での修行で才能が傑出していて、32歳のとき、天台宗の最難関の試験に合格し有名になりました。京都にも噂がひろまり、天皇知るところとなりました。若くして天皇の前で講義をし、褒美を下賜されました。源信は得意になって褒美を母におくったのですが、母からは次の歌を添えて送り返されました。

「後の世を渡す橋とぞ思いしに世渡る僧となるぞ悲しき」 その時から源信は自分の不慮を恥じて人前に出ることなく、終生、叡山の北の奥にある横川のよかわ恵心院で修行を積みました。

源信は多くの書物を学び、44歳の時に「往生要集」を著しました。これは死ぬときの心構えを書いたものです。自分はずぐれてはいない。どのように努力しても「さとり」には近づけないので、阿弥陀さまに助けをもうしか無い。

往生するには念佛しかない。



14世紀、南北朝時代の作。滋賀・聖衆天迎寺蔵 写真 京都国立博物館
恵心僧都源信像

「往生要集」には念佛を唱える理由づけとして、十門により構成されています。

1. 穢れた世界から離れる「厭離穢土」
2. 浄土を願う「欣求浄土」
3. 極楽を勧める証拠
4. 正しく念佛する「正修念佛」
5. 念佛の助けとなる方法
6. 別時念仏
7. 念仏の利益
8. 念仏の証拠
9. 往生の諸業
10. 問答料簡

○八つの地獄

1. 等活地獄
2. 黒縄地獄
3. 衆合地獄
4. 叫喚地獄
5. 大叫喚地獄
6. 焦熱地獄
7. 大焦熱地獄
8. 阿鼻地獄

地獄では一日が何百万年となり、それが何百年間にわたり、鬼からの想像を絶する耐えられ無いほどの責めがあります。(責めの内容はおぞましく書けません)

地獄に行かないようにしなければ・・・

○生きていくには執着しないこと

“盛りあるものも衰え

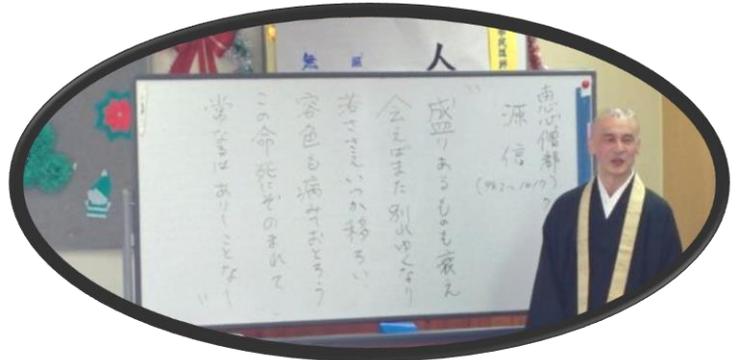
会えばまた別れゆくなり

若ささえいつか移ろい

容色も病みておとろう

この命死にぞのまれて

常なるはありことなし “



○観音様にすがりなさい。

観音様（観世音菩薩）は三十三の姿に変身されます。

あらゆる身体に、それぞれ形を変えて色んなことを教えてくださっている。

ひょっとして身近な人も変身かもしれません。

100%嫌な人も、完全な人もいません。好きや嫌いも自分の欲から出たメガネを通して見ています。あえてそれを外して“浄穢不二”“空”で観て、それを解ったうえでメガネをかけ付き合っていくことが肝要とのことです。

法話の後は写経です。

写経の書き方についての説明があり、皆さん黙々と写経をしました。写経の時間は貴重なもので、気持ちが落ち着き清々しいものがありました。

